

越。血判。誓紙相濟、以後乘輿但五ケ月限。故度々御目付衆江罷越、神文致ス、

〔憲教類典三之三〕三十六年號月日不知

陪臣乗物駕籠願之覺

行年五十歳以後願之、但家老は乗物、其外共駕籠免許也、

一 右願之事、其主人書付を以て、月番之御老中江被申達之、御老中より御目付衆江被仰渡、月番之御目付衆之宅にて、願之者誓詞血判いたし、相濟也、

一 御老中江願之證文

江戸詰家老之 姓氏假名

右私家老に而御座候、御當地差置、用事申付候當年何十何歳に罷成候、何病氣に而馬上之勤難相叶御座候に付、乗物被遊御免候様奉願候、以上、

年號月日

堀周防守居判

宛所なし

附榊原式部少輔ハは、月番御老中を注ざるよし也、

一 右之趣、其向寄之御目付衆江様子被相尋候上にて、如左認之、堀田筑前守御用番之由を以て被達之候處、件之趣御目付衆江被仰達之候間、向寄之御目付衆江願之者差越、誓詞いたさせ可然候由御差圖也、

一 御目付衆江願之者指越時書札案

一 筆致啓上候、私家來何某と申者、當年何十何歳に罷成候、御當地差置、用事申付候、持病眩暈、其上不步行御座候而、馬上難叶御座候間、其身誓詞被仰付之、乗物御赦免被成可被下候、恐惶

謹言、